# 海揚がりの神様仏様

「海揚がり」とは、本来、漁などで揚がる陶磁器類を指しますが、時に神様仏様の像の場合があります。市内では、このような「海揚がり」の神仏像が江戸時代から平成までの間で4例知られています。うち3例は厚田区知津狩から望来付近で揚がったもので、今回は現存する2例を紹介します。

一例目は、厚田区古潭の「龍澤寺」にある阿弥陀如来です（写真1）。この仏様は銅製で、高さ40㎝ほどの小型の仏像です。金箔などはとれて黒ずんで、衣の襞などは摩滅し、海中にあったことを物語っています。像は明治の少し前の元治元（1864）年秋、厚田区知津狩でサケ網にかかり、翌慶応元（1865）年、夢のお告げで同寺に安置されました。由来は安置する際、新調された厨子の裏に書かれています。

二例目は、おそらく望来付近の網で揚がったと推定される恵比須様で「石狩弁天社」（弁天町）にあります。いうまでもなく漁業の神様ですが、ご神体は化石を含んだ三角形の自然石（高さ約30㎝）です（写真2）。じっと見ると恵比須様の姿が浮かんできます（写真3）。厨子に天保10（1839）年と書かれていて、この年に祀られたことが分かります。

ご神体とは別に「恵比須石」※1とみられる巻き貝の化石も数個納められています。いずれの石も「望来層」※2（910万年前～760万年前）からはがれた石と思われ、層がある望来付近で揚がった可能性が高いです。

現在このような「海揚がり」の神様仏様の調査をしていますが、全道的に数少ないようです。石狩市以外の例としては、明治初期に奥尻町とせたな町の間の海で採取された円空仏※3ほか1例があります（写真4）。

（石橋孝夫）

写真1:阿弥陀如来像（龍澤寺）

写真4:円空仏

写真3:恵比須様のイメージ

写真2:恵比須様（弁天社）

※1 恵比須信仰では網にかかる石を恵比須石として大事にする
※2 石狩ファイル NO.0145−02「望来層の化石」
※3 江戸時代の修行僧、円空（1632−95）が作った仏像

石狩市学芸協力員
石橋孝夫 Takao Ishibashi
専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究する。

■文化財課　いしかり砂丘の風資料館　☎62・3711

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。